

## 『源氏物語』における「中の品」女性論

— 「葎の門」を手掛かりに—

馬 如 慧\*

### 一、はじめに

「雨夜の品定め」において、左馬頭の言葉「世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ限りなくめづらしくはおぼえめ」から論をはじめたいと思う。左馬頭の言葉は、光源氏に強い印象を残しているに違いない。光源氏が常にこの言葉を意識しているからこそ、後に夕顔や末摘花の話へと物語が展開していくわけである。では、左馬頭の言う「葎の門」に隠れ住む女性とはどんな存在であろうか。

### 二、「葎の門」の寓意

「葎の門」は、荒廃・衰退の象徴であるはずであり、不吉とされた方が自然だというもの、「葎の宿」に住む女は、裕福な生活とは縁遠い存在であるため、男性を後見する力が乏しいと言える。平安時代において、貴族男性にとって、妻方からの経済的支援が非常に大切であり、妻方の零落は離婚の原因にもなっているほどであると思われる。なのに、なぜ平安時代では「葎の宿に住む女」が人々の想像を膨らませ、ロマンティックな場面として物語にも取り入れられるようになったのだろうか。

『万葉集』において、すでに「むぐらふ」や「八重むぐら」が歌語として見られている。例えば、

「いかならむ時にか妹をむぐらふの汚きやどに入れますてむ」（『万葉集』巻第四 759）・「玉敷ける家も何せむ八重むぐら覆へる小屋も妹と居りてば」（『万葉集』巻第十一 2825）。ここでは、「葎の宿」に世に知られずにいる気品高い美女が住んでいるという発想がなく、単に陋屋という意味で使われている。

しかし、上代において、「葎」は歌語として『万葉集』に詠まれているのに対して、同時代の漢詩文においてはまったく詠まれていない。それは恐らく、中国の漢詩において、「葎」が一切詠まれたことがなかったからだろう。一方、「葎」とよく一緒に描かれる「蓬」のほうが、漢詩文においてよく描かれている。

伏枕吟

陸奥少目従八位下桑原公宮作一首

勞伏伏枕枕不勝思。

沈痾送歲。力尽魂危。

垂謝蟬兮垂白。衣懸鶉兮化緇。

悽然感物。物是人非。

撫口以耿耿。陟岵岵而依依。

悵雲花於遽落。嗟風樹於俄衰。

池臺漸毀。僮僕先離。

客斷柳門群雀躁。書晶蓬室晚螢輝。

月鑑帷兮影冷。風扞牖兮声悲。

聽離鴻之曉咽。觀別鶴之孤飛。

倒絕兮悵今日。淚潺湲兮想昔時。

榮枯但理矣。倚伏同須期。

特皇天之祐善。折靈葉以何為。

\*北京外國語大學研究生院生

(『凌雲集』)

南陽諸葛廬，西蜀子雲亭。

孔子云：何陋之有？

五嘆吟

源順

一隔蔽容十有年。又無親戚可哀憐。  
單貧久被蓬門閉。示誠多教竹簡編。  
聲是不伝歌白雪。徳猶難報仰青天。  
立名終孝深聞得。成業争為拜墓辺。

(『扶桑集』第七卷)

上代より時代が下がって平安時代初期の詩ではあるが、桑原腹赤の詩も、源順の詩も、完全に中国的文人の発想に影響されているものであると言える。「蓬室」は貧乏の象徴であり、「蓬門」はお客が訪ねてこない寂しい印象を残しており、唐詩において、特に杜甫や白居易の詩によく描かれ、不遇や貧乏を悲嘆するものが多々ある。例えば杜詩に「棄絶蓬室居，塌然摧肺肝」「所居秋草浄，正閉小蓬門」があり、白詩に「蓬莠生庭院，泥塗失場圃」「葺茅為我蘆，編蓬為我門」がある。漢詩における「蓬」の世界は、完全に文人的世界で、『万葉集』のそれと一線を画している。

一方、中国では、「蓬門」や「陋屋」に関する漢詩を詠む者は、凡そ胸に大志がありながら不遇な文人たちである。彼らは、自分が陋屋に住みながら、品格の高い人であると自己評価している。その中で一番有名な詩は、唐の時代劉禹錫の「陋室銘」である。

陋室銘

劉禹錫

山不在高，有仙則名。  
水不在深，有龍則靈。  
斯是陋室，惟吾徳馨。  
苔痕上階緑，草色入簾青。  
談笑有鴻儒，往來無白丁。  
可以調素琴，閱金經。  
無絲竹之亂耳，無案牘之勞形。

劉詩は、陋屋がそこに住む名士たる自分によって、雅やかであるように見えるという。作者は、陋屋を賛美することで自分が貧しくても高い品格の持ち主で、風雅な君子であることを表している。そして、有名な諸葛孔明や揚子雲も陋屋に住んでいたことを例に挙げ、高潔な心持があれば陋屋に住むのを恥じることがないと唱えている。このような陋屋をむしろ礼賛する心掛けは日本漢詩の世界に取り込まれていないようである。

さて、三代集の時代になると、「八重葎」は歌語として定着されている。

今さらにとふべき人もおもほえず八重葎して門鎖せりてへ

(『古今和歌集』卷第十八 雑歌下975 読人知らず)

八重葎茂き宿には夏虫の声より外にとふ人もなし  
(『後撰和歌集』卷第四 夏歌194 読人知らず)

久しうとはざりける人の思ひ出でて、今宵詣で来む、門鎖さであひ待て、と申して、詣で来ざりければ

八重葎鎖してし門をいまさらに何に悔しく開けて待ちけむ

(『後撰和歌集』卷第十四 恋歌六1056 読人知らず)

河原院にて、荒れたる宿に秋来といふ心を、人々読み侍りけるに

八重葎茂れる宿の寂しきに人こそ見えね秋は来にけり

(『拾遺和歌集』卷第三 秋140 恵慶法師)

まず、『古今集』975番歌と『後撰集』1056番歌は、ともに女歌である点に注目すべきだと思われる。そして、二首の歌はともに久しく訪ねてこな

い男に対して女のやや自嘲気味な歌であり、男が訪ねてこない我が家を八重葎で閉ざされた門と言っている。それは明らかに、中国の漢詩文における「蓬門」のイメージを汲んでいると思われる。中国において、「蓬門」はおおよそ「無客訪」を意識して詠まれている。それは文人たちが自分の不遇であるから客人が訪ねてこないことを自嘲して詠むことだが、日本では何と女歌において男が通ってこないことを詠んでいるのが大変興味深いところである。そこから漢文学と和文学の性質的な異同が尤もみられるのではないかと思われよう。『後撰集』194番歌と『拾遺集』140番歌は、漢詩文の趣向を取り入れたものと思われ、ことに『拾遺集』140番歌は「荒宿秋来」を題とした句題歌で、漢詩的雰囲気を感じていると同時に、日本ならではの季節を感じる繊細さが見出させる。三代集における「葎の宿」や「葎の門」の歌は、やはり風流的やロマン的な趣向がないと思われる。

一方、「葎の門」は「荒れたる宿」の象徴であると思われ、「葎の門」ではなく「荒れたる宿」を手がかりに考察してみると、『万葉集』においてはやはり「葎生」と変わらず我が家を謙遜的という印象が見受けられる。しかし、三代集において、

ものへまかりけるに、人の家に女郎花植ゑたりけるを見てよめる

女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたる宿にひとり立てれば

(『古今和歌集』巻第四 秋歌上237 兼覧王)

奈良へまかりける時に、荒れたる家に女の琴ひきけるを聞いて、よみて入れたりける

わび人の住むべき宿と見るなへに嘆きくははる琴の音ぞする

(『古今和歌集』巻第十八 雑歌下985 良岑宗貞)

荒れたる所に住み侍りける女、徒然におもほえ侍りければ、庭にある葎の花をつみていひか

はしける

わが宿に葎の花の多かれば来宿る人やあると待つかな

(『後撰和歌集』巻第三 春歌下89 読人知らず)

上述した「陋室銘」のように、中国では、陋屋に品格の高い君子が住んでいる印象を残しており、そこに中国の文人たちの自己誇示が見られる。それに対して、日本では、「荒れたる宿」に案外美しく気高い姫君が埋もれているという幻想が文学において窺われる。『古今集』237番歌は、兼覧王があるところに行った時、その家の庭に女郎花が植えてあるのをみて詠んだ歌とされるが、しかしそれがどうも単に女郎花を詠んだ歌とは考えられない。古典和歌において、「女郎花」が歌語として多用されているが、その多くは花を女性に喩えたものである。この歌も、旧家の姫君が一人寂しく住んでいるのを花に見立てて、ロマンチックな空想をめぐらした歌と解するべきではないだろうか。『古今集』985番歌は、僧正遍昭が奈良へ下った時に、荒れた家で女性が琴を弾いているのを聞いて詠んだ歌であり、侘び住まいにゆゑある琴の音が漏れてくるとは、やはり想像を膨らませるものである。『後撰和歌集』89番歌は、荒れた家に住む女が退屈しているので、庭に植えてある葎の花を摘んで男に贈った歌であると詞書に書いてあるが、いわゆる女からの贈歌のようにみえる。女からの贈歌として理解しても大いに結構だが、返歌の記述もなく、女からの贈歌自体も珍しいものなので、これが男が荒れた宿に住む女性を幻想しながら書いた歌ではないかと推測できなくもないであろう。

和歌においてだけではなく、散文作品において葎が生えている荒れた宿触にれたものがある。『大和物語』百七十三「五条の女」において、良岑宗貞少将がある所へ行く途中で、五条あたりで荒れた宿を見かけ、そこで雨宿りしようと思うと、誰もいないと思っていたが申し分もない素敵な女性

が御簾の中から覗かれる。中の調度品などを覗いてみると栄えた昔の様子が偲ばれるが、いまはみすばらしくなってしまうている。少将は荒れた宿で一晩を明かし、その後、女に生活必需品を届け、生活上の援助を行ったという話がある。また、『うつほ物語』「俊蔭」巻において、若小君が俊蔭娘と出会う場面を思い浮かべる。俊蔭が亡くなって後、俊蔭娘はずっと手入れする人もなく荒れた家で貧しい生活を送っていた。ある日、太政大臣が賀茂参詣とのことで、盛大な行列が俊蔭娘の荒れた家の前を素通りした。行列の中にいる若小君は、荒れた家の破損した葺戸のそばで見物する俊蔭娘を見かけ、その美しい姿を忘れずにいた。その若小君は夜になると、再び荒れた宿に訪ね、心境のためか、荒れた庭園も情趣深く見えるのであった。

### 三、「雨夜の品定め」と「葎の門」に住む女の事情

上述した通り、平安時代の和歌や散文作品において、「荒れたる宿」は衰退・零落を象徴するだけでなく、零落したにも関わらず気高い美女が住んでいるのではないかと男性たちに幻想を持たせ、風流でロマンチックな趣向すら帯びている。そして、男性作品だけでなく、『枕草子』において次のような章段がある。

荒れたる家の蓬深く、葎はひたる庭に、月の隈なくあかく澄みのぼりて見ゆる。また、さやうの荒れたる板間よりもり来る月。荒うはあらぬ風の音。

（『枕草子』一本二五）

『枕草子』におけるこの章段は、女性作品だけあって、零落した姫君への期待はもちろんなく、単に荒れたる家の景色を風流としたまでである。そして、清少納言が綴ったこの章段の描写、特に「月」や「風」への注目は、『うつほ物語』「俊蔭」

巻の景色描写を踏まえていると考えられよう。つまり、清少納言自身が荒れた宿を懂れているわけではなく、古物語にいるシーンを想像しながらそれを風流としたのではないかと思われる。

三代集の時代において、「葎の門」は歌語として定着していくが、それは女歌において訪ねてこない男を当てこすって自分の家を「葎の門」というだけで、「荒れたる宿」のような零落した姫君への期待を含まれていない。「葎の門」や「葎の宿」に「荒れたる宿」と同格に落ちぶれた姫君が閉じこめられているのではないかという幻想をもたらしたのは『源氏物語』「帚木」巻における左馬頭の言葉「さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられたらむ」であろう。『源氏物語』以後に成立した勅撰和歌集において、「葎の門」がよく「花」と一緒に用いられるようになっていく。例えば、『後拾遺和歌集』春上114に、「桜花盛りになれば故里の葎の門もさされざりけり」があり、また『新後拾遺和歌集』雑春歌613に、「さしこもる葎の宿の花にさへなほ思ひある春風ぞ吹く」などがある。それは『源氏物語』をうけて荒廃した屋敷に美女がひっそりと隠れ住む幻想を含めながら詠んだ和歌として理解すべきではないだろうか。

『源氏物語』は、はじめて本格的に「荒れたる宿」に閉じ込められる零落した姫君という話型を取り上げた女性作品である。そして、「雨夜の品定め」は、男性側のみになされる「中の品」の女性論議であることで、『源氏物語』全篇において特異性を持つ一帖であると思われる。「雨夜の品定め」における「葎の門」に隠れ住む姫君の話は、左馬頭が展開した「中の品」の女性論の発端である。左馬頭は、まず、「上の品」の女性がどんなに立派に育てられても、それが当たり前と思われ、そしてそのような高貴な女性は彼の手の届くところではないと言っている。そこで、「中の品」の女性の代表として、「葎の門」に住む零落した姫君の話と言及する。頭中将の言葉に、「葎の門」

に住む姫君の一番の特徴といえば、気品が高くても財力がなくては不如意がちで、体面も保たれないところである。このような女性に男性の後見の役割を求められないだろう。

平野美樹氏は論文において、もし「品定め」の主体である男性たちも「品」によって分けられれば、左馬頭と式部丞が「中の品」に当たり、光源氏と頭中将が「上の品」に当たることを言及している<sup>1</sup>。その構想を借りてみると、「中の品」の男性の特徴としては、女性からの衣食住の世話を頼りにしていることであるが、なぜ彼がその役割を果たせない「葎の門」に住む姫君に幻想を抱いているのだろうか。

「雨夜の品定め」において、左馬頭は「浮気な女」の体験談を語っていた。その女の住処について、

荒れたる崩れより池の水かけ見えて、月だに宿る住み処を過ぎむもさすがにておりはべりぬかし。(中略) 菊いとおもしろくうつろひわたりて、風に競へる紅葉の乱れなど、あはれとげに見えたり。

(『源氏物語』「帚木」巻)

左馬頭の体験談に出る「浮気な女」の住処の描写から見れば、彼女はいかにも「荒れたる宿」に住んでいる。そして「荒れたる宿」に住む浮気な女はどういう人かというところ、

人も立ちまさり、心ばせまことにゆゑありと見えぬべく、うち詠み、走り書き、掻い弾く爪音、手つき口つき、みなただどしからず見聞きわたりはべりき。

(『源氏物語』「帚木」巻)

彼女は「ゆゑ」ある女性である。小学館新全集の注釈に、「『よし』は、二流の人々の人品・教養・風情。一流のそれは『ゆゑ』」とあり、「浮気な女」の元々の出自が高貴であると推測されよう。「浮

気な女」こそが、「葎の門」に閉じ込められている零落した姫君であったと思われる。しかし、やはり「浮気な女」に妻として後見の役割を果たす力がなく、馬頭が「浮気な女」に何を求めているかということ、まさにその「ゆゑ」だろう。『晝花抄』において、「故とは種姓などにや」というが、つまり「ゆゑ」は家柄からの生まれつきの高貴さであるともいうべきである。左馬頭と身分相応の後見のできる「中の品」の女性には、そのような「ゆゑ」を求めることこそ無理な注文であるし、左馬頭自体は「ゆゑ」ある「上の品」の女性に手が届かない。そこで、家門の零落や父兄の死亡によって「上の品」から「中の品」に転落した「葎の門」に住む姫君こそ、「中の品」の男性にとって手頃の相手だろう。

では、光源氏や頭中将のような「上の品」の男性にとって、「葎の門」に隠れ住む姫君はどんな存在だろうか。「上の品」の男性の特徴としては、経済的に余裕があり、女性の面倒を見ることが可能であることである。しかし、「上の品」の男性は、単に献身的に女の世話をしたいから面倒を見ているわけがなく、彼らはそのような女性に何を求めているのだろうか。

「雨夜の品定め」において、頭中将は「内気な女」の体験談を語っていた。「内気な女」の家はやはり荒れはてた宿である。この「内気な女」は、後に「夕顔」巻に登場する夕顔の女であり、そして彼女の乳母子である右近の話から、彼女は元々三位中将の娘であったことが分かる。三位中将は、大臣の子や孫に限られた特別待遇であり、夕顔はかなり尊い家系の血筋をひいているはずである。「内気な女」も、「葎の門」に隠れ住む零落した姫君の類であろう。

そして、女の人柄について、彼女は従順でやさしく、素直に頭中将を頼りにしているとされている。「上の品」の男性とその正妻は、ほとんどの場合では政治結婚で結ばれている。『源氏物語』において、光源氏はそうであり、頭中将もそうで

ある。そうした場合、彼らには経済的支援を必要としないが、別の意味での妻方の後見——政治的・人脈的後見を婚姻に求めている。そして、その正妻たちは父の後見を盾にし、冷淡なり嫉妬心が強いなり、男にとっては手を焼く存在でありながら、やはりその父に免じて大切にできるしかない。そこで、妻たちと同じくらい由緒正しくありながらやさしくいいなりになり、嫉妬心もなく大切にしなくてもいい女がいたら、無性に可愛く見えるだろう。

#### 四、むすびにかえて

「雨夜の品定め」は、男性視点からの一方的な語りである。その場に女性がないからこそ、男性たちが女性に求めているものを言いたい放題に口にすることができる。左馬頭の話も、頭中将の話も、悲劇に終わっている。そして彼らは、その悲劇を招く原因は女性方にあるという。彼らは男なりのロマンチックな幻想を「葎の門」に住む女性たちに押し付け、不如意のことがあった挙句、やはり世間に完璧な女がないのだと嘆いてしまう。「雨夜の品定め」は男性たちの長い会話文によって構成され、草子地自体が少ない。それでも、男性視点の矛盾と女性に対する理不尽さがその会話文を通して読者たちに伝わってくるのではないかと思われる。

『源氏物語』において、本格的な「葎の門」に隠れ住む物語は、夕顔物語と末摘花物語であると思われ、「帚木」巻の射程内にありながら、女性視点が増えられたことによってまったく異なった物語が展開される。それについては「夕顔の人物像の二重性」と「末摘花の家門意識」を手がかりに論を広げたいと思う。

#### 注

- 1 「「雨夜の品定め」考：女を語る男の事情」、日本文学 52(6)、2003年